



早稲田大学ビジネススクール 教授

西村 吉正氏

語

Yoshimasa Nishimura

金融

にしむら よしまさ

Profile

1963年大蔵省入省。79年欧州共同体（EC）日本政府代表部参事官。84年大蔵省主計局主計官。92年大蔵省財政金融研究所長を経て、94年6月大蔵省銀行局長就任。96年7月大蔵省退官。同年、スタンフォード大学特別客員研究員。97年に早稲田大学教授に転身し、現在に至る。『日本の金融制度改革』、『金融行政の敗因』をはじめ著書多数。

日本の国際競争力の低下について言及する際、日本のGDP世界ランキングが中国と逆転する可能性を示唆するものが多い。果たして、中国よりも上位に続けていけば国際競争

Financial Information Technology Focus

金融の低迷は、金融だけの問題ではない

大崎 先生は大蔵省の銀行局長時代に不良債権問題に取り組みられたというご経歴から、今は早稲田大学で金融制度を研究されておられます。不良債権問題が解決したといわれてもう随分になりますが、日本の金融機関はいまひとつ、びりっとしないという見方もあります。少なくとも世界に冠たるとは見られていない。それは何が問題だとお考えか、というあたりから伺っていききたいと思います。

西村 よく金融関係者は、今おっしゃったような問題を指摘します。

私は、金融というのは1つの側面であって、日本の金融の状況は、結局、日本経済の状況を反映しているにすぎないと思っています。

「失われた10年」とか「15年」というのは、決して金融だけの問題じゃなくて、経済そのものの問題だと思います。ですから、金融の関係

者が、「おれたちがふがなかったから、こんなことになっちゃったのかな」なんて思い過ぎないほうがいいと思います。

大崎 そうすると、日本経済が行き当たった問題は、先生からご覧になると、どんな問題だったと言えるのでしょうか。

西村 日本の経済だけじゃなくて、日本という国の在り方の問題になると思います。

幕末から明治にかけて、欧米からの圧力がかかって、脱亜入欧路線に向かいました。相当無理をしたけれども、「アジア的停滞」からの脱出には大成功しました。それが戦後の高度成長期の歴史を作りました。

80年代、1人当たりGDPが欧米に追いつき追い越したというのは、入欧路線の終点に来たということだったのだと思います。終点に来たのだけれども、もともと自分のやり方ではないから、そこから先、どうしたらいいのかわからない。

大崎 お手本がなくなっちゃった

ら、実は大したことはなかったという、そんな感じですかね。

西村 どうしたらいいかわからなくなってしまったところに、人口のピークがきてしまった。20世紀の間に日本の人口は3倍になったわけだけれども、その原動力が下り坂に差しかかったのが、1995年、生産年齢人口のピークだったわけです。

もうちょっと前に脱亜入欧路線から自分たちのやり方みたいなものを考えておかなければいけなかったんだけど、あまりにうまく行っていったものだからそういうことに気がつかないで、バブルに浮かれてしまった。

大崎 それは決して金融機関とか金融業だけの話じゃなくて、日本社会全体が、ある意味、モデルを失って、新しい方向性をうまく作り出せなかった、ということなんですよ。

そういう意味では、アジア諸国も、日本とそんなに違わないという

らう 大崎 貞和

Sadakazu Osaki

対談



Profile

おおさき さだかず

1986年野村総合研究所入社。99年資本市場研究室長。2008年4月より研究開発センター主席研究員。現在、早稲田大学ビジネススクール客員教授、東京大学法科大学院客員教授を兼務。金融庁・金融審議会臨時委員、経済産業省・産業構造審議会臨時委員などの公職も務める。著書に「解説 金融商品取引法」【第三版】、「金融構造改革の誤算」など。

力を維持していると言えるのだろうか。真の国際競争力とは何か、早稲田大学の西村教授に語っていた。

か、やっぱり欧米モデルを追いかけられているように見えます。例えば韓国は、欧米モデルを追いつつ、その手前の目標として日本を追いかけられているように見えます。そのあたりはどう見ておられますか。もっと、アジアのほかの国は、日本にない「アジア・モデル」みたいなものを追求するだけの底力があるとお覧になっていきますか。

西村 70年代から80年代は、日本が一番輝いていた時代でしたから、マハティールさんの「Look East(日本に学べ)」に代表されるように、韓国、台湾はもちろんのこと中国でさえ、90年代の初めころまでは、「日本モデルがわれわれのモデル」ということで、「日本的経営」とか「日本的な何々」が流行しました。日本人も「もし何かあったら、どうぞ聞いてください」みたいな感じで、自信を持っていたわけです。

ところが、その雁行隊形の先頭を切っていた日本が怪しくなっ

てしまった。日本型脱亜入欧路線がおかしいみたいだということで、次にとったのが直接欧米に学ぼうということです。日本の脱亜入欧路線は駄目だったから「自分で考えよう」というところにはまだ至っていないんです。

しかし、中国が少なくとも経済的には第一の経済大国になり、アジアの発展、成長力が世界の中でも最も高い地域になったとすると、そこで単なる脱亜入欧路線で我慢できるかなという気はします。

大崎 むしろ、自分たち独自のものを見せたいかなというか、出たくなるというか。

西村 ええ。日本は80年ごろ、「ジャパンアズナンバーワン」とおだてられたせいもあって、何か自分流のやり方を世界に提示できないかな、ということを考えて。しかし、結果的に、できなかったんですね。

グローバルスタンダードという意味では、日本は2000年の歴史で握ったことはありません。しかし、

中国はその4000年の歴史の中で何度も握ったことがあります。世界史上、最も長く覇権を掌握していたあの中国人が、英語で仕事をしなければいけない、ということに我慢ができるのかなと。

大崎 すなわち、ある段階から独自性を追求し始める可能性がある、ということですね。

Financial Information Technology Focus

中国発 グローバルスタンダード

大崎 中国発グローバルスタンダードがいずれ出てくるというお話は非常に興味深いものだと思いますが、幾つか気になる点があります。

まず、それが具体的にどのようなものになるかはまだわからないと思いますので、それはさて置くとしても、ひとつは、仮に中国発のスタンダードが実際に姿をあらわした時に、日本人が果たしてそれに適合できるのかどうか。特に、近年の日中関係がぎくしゃくしていたり、日本



アジアの力なくして、日本の金融市場の国際化は成り立たないのではないかと思います。

人の中に、一種妙な敵意を持つような傾向があったりするのを見るにつけても、果たしてそこにうまく入っていけるのかというのが気になります。もうひとつは、欧米の人たちはそれに対してどんな態度を取るんだろうかというのが気になります。その辺はいかがでしょうか。

西村 私もそれが非常に気になります。日本人は、江戸時代までは中国文明・中国人というものに対して大変な敬意を払っていました。大体、漢文が書けないような人は文化人・教養人として見られていなかったわけです。

ところが、幕末から明治にかけて、一転してしまった。日本人はこの100年近く、「われこそ傑出したアジアのリーダーなんだ」という意識で頑張ってきた。そして、更に「世界のリーダーシップを握れるかもしれない」と思ったところで、つまずいてしまった。

大きな挫折感を味わっているところに、中国に追い抜かれてしまった。世界の国々も、「アジアのリーダーは日本というよりも中国だ」と考えだしたみたいだということで、日本人全体がすごく焦っているわけです。嫌中感情というのは、そういう日本人の焦りというのか、失望感と裏返しになっている面があって、とても厄介な感情なんです。私は、こ

れからの日本の針路を決める上で最も大きな障害というか問題点になるんじゃないかと思っています。

しかし、今置かれている状況を冷静に判断し、そういうものを克服していかなければいけないわけです。

大崎 欧米人にもやや日本の対中観と似たようなものを感じますが、そこはどうでしょう。むしろ、時代が変われば、欧米は中国発グローバルスタンダードもそれなりにずっと受け止められるとご覧になっていますか。

西村 私は、今、日本について言ったことと似たようなことがアメリカについても言えると思っています。アメリカは建国して230年くらいですよ。

アメリカの最も発展した20世紀は、中国にとっては失われた世紀だったわけです。だから、アメリカから見ると、中国は大国あるいは文明国としてのイメージがわきにくいということはあるかもしれない。

対中国観という意味では、世界の中で日本が一番極端、その次がアメリカが特殊というところはあるのかもしれないですね。

大崎 共通点はあるとはいえ、それは世界全体から見ると、どちらかというと少数派になってしまうということですね。

Financial Information Technology Focus 3 大金融市場における立ち位置

大崎 アジアの国の中で先駆けて近代化に成功したという実績を生かすには、日本にはどのような道があるのでしょうか？

西村 東京は、「ニューヨーク、ロンドンと並ぶ世界3大金融市場の一つになる」ということを掲げていました。

しかし、考えてみると、ロンドンだってイギリスの国力を背景に成り立っているわけではありません。英



語を基盤にして覇権国アメリカと手を組み、ヨーロッパ大陸も引き込んで、ロンドンという場所を貸して発展しているわけです。そういう意味では、「ウィンブルドン現象」というのはよく言ったものだと思うけれども、ウィンブルドンになるだけの力をロンドンは持っていたということもいえるわけです。

だとすると、東京は、欧米におけるロンドンの立ち位置をもっと意識したほうがいいと思います。東京は日本を代表しているのではなくて、アジアの力をベースにし

て、もっと広いアジアを代表できるような方向に向かうことができたらいいのではないかと思います。その場合には、日本人はもっと中国語ができなければいけないかもしれない。そういうことも考えないと、本当の意味での日本の金融市場の国際化は成り立たないのではないかと思います。

大崎 確かにそうですね。考え方をちょっと変えてみると、日本人は漢字が読める、書けるというだけでも、ほかの国の人よりは有利かもしれないですね。



西村 それはすごく有利です。発音が難しいとか何とかと言うんだけど、ほどほどに日本流の中国語の発音で通用するものです。ですから、中国語が国際語になった時に最大の利益を受けるのは誰なのかといたら、日本人なんです。

日本人はもっと中国語の国際語化を支援してもいいのだけれども、障害になっているのが、この100年間の日本人の中国に対する感情です。

大崎 例えば、最近、野村證券のインサイダー取引事件がありました

が、一部の報道では中国社員の犯行であったことが過度に強調されていたように感じます。

西村 シンガポールで起こったベアリングス事件は、イギリス人トレーダーによる不祥事でしたよね。けれども、「イギリス人は信用できない」といった話は全然出なかった。

大崎 確かにそうですね。

西村 私は、そこに日本社会の非常に大きな問題点があって、21世紀における日本の針路に非常に大きな障害になるのではないかと、というのが気になります。

大崎 逆に、そこさえ克服できれば、むしろ日本のメリットになる可能性があるわけですね。

西村 この100年間ぐらいを除けば、それが普通の日本の社会だったわけです。

例えば、蒙古来襲の時に、日本の総理大臣である北條時宗の政治・外交顧問は誰であったかという、中国人です。

大崎 建長寺の禅僧ですね。

西村 中国から亡命してきた無學祖元です。その時代の僧侶は、大学教授みたいなものです。日本人は国際社会のことを知らない。世界のことを知っている人として、中国人の亡命学者が政治・外交顧問になっている。その時に、無學祖元と北條時宗とは何語でしゃべっていたのかなど。

大崎 非常に重要な、微妙なことを扱っているわけですから、直接しゃべっていたはずですね。

西村 そう。鎌倉時代までは、少なくとも、日本の政府の公文書は全部、漢字、中国語です。外国語で公

文書はすべて書かれていたということから見ると、恐らく時宗はアドバイザーと、たどたどしいかもしれないけれども、中国語で話していたのではないかなと思います。

そういう時代が、21世紀、22世紀になると来るかもしれないという気がしています。

今の日本の金融界での国際化論、グローバル化論というのは、脱亜入欧路線の延長線上にある議論しかないように見えます。現実的には、仮に数字の上では中国のGDPのほうがアメリカよりも大きくなった段階でも、運営の原理原則、グローバルスタンダードというのは、当分、欧米流のものが世界を支配すると思います。しかし、この20年ぐらいの間に、ものすごく大きな変化がそこには起こってくるんじゃないのか。単に20世紀の延長線上で考えていたら、判断を間違え、また日本のチャンスを失ってしまう可能性だってあると思います。

大崎 これまで、日本が欧米流を中途半端に導入したのが問題だという思い込みが強かったのですが、先生のお話を伺って、「さらにその先を見なさい」ということを学んだように思います。

本日は、ありがとうございました。

(文中敬称略)

